

## ◎小学生の部

### 太田玉茗賞

#### 藍にひめた想い

羽生北小学校 四年

尾島 稜河

部屋にかざられた一枚の藍染めのハンカチ  
このハンカチには  
たくさんのお思い出がつまっている  
小学校三年生の校外学習で  
藍染め体験をした時につくったものだ  
異臭がする部屋の中  
手を真っ青にしてむ中で染めたハンカチ  
絵の具や色えんぴつには決してない  
「青より濃く、こんよりもあわい色」  
ぼくの描いたダイヤ模様も  
はつきり染め上がり

出来上がった時のうれしさは  
今も忘れることはない

ぼくにとって藍染めは

小さい頃から何よりも特別な染め物だ  
剣道で着そうする道着とはかま

深い藍に染まった道着を初めて着た日  
不思議と背筋がのびて力がわいた

(強くなりたい)心から思った

きびしいけい古で流す汗

試合で流した多くのくやし涙

そして うれし涙

道着のそでで涙をふくたび

(次こそは)と心にちかう

ぼくの汗と涙が思い出という色を加え

藍はより深い染めとなり

決して色あせることはない

ふるさとの伝統染め「藍」

ぼくは今日もこの藍を着てけい古にはげむ

むねをはり

一つでも多くの勝利をつかむために

※道着…剣道着のこと

## 宮澤章二賞

### はつ山まつり

須影小学校 二年

藤井 萌恵

四月に生まれた弟の はつ山まつりに行った  
じいちゃんか  
「赤ちゃんのせいちようを ここのかみさま  
におねがいをするおまつりだよ」  
と 教えてくれた

東ぶ線のふみきりのよこにある  
せん間じんじやには  
弟とおなじくらしいの赤ちゃんをだっこした  
家ぞくが たくさんいた  
知らない人たちから  
「はつ山おめでとうございます」  
と言われて うれしくなっておれいを言った

とりのいをくぐり かいだんを上った  
日本一高いふじ山に上ると

おなじいみがあるときいて  
一だん一だん ころをこめて上った

弟のおでこに はんこがおされた  
ないちやうかなと しんぱいしたけど  
弟はにこにこしていた  
わたしがなきながらおでこにおされている  
しゃしんが 家にあつたのを思い出した

じんじやの中で おいのりをしてもらった  
しずかで とてもきんちようした  
かいだんを下りる時は かみさまにまもられ  
ているような気もちになって ほっとした  
弟のおまつりだからと がまんしていた  
チョコバナナをお父さんにかつてもらった  
弟が元気にせいちようしますようにと  
わすれずにおねがいをした

## 優秀賞

### 夏祭り

羽生南小学校 六年

上村 朱璃

今年も夏祭りがやってきた  
父も母も楽しみにしていた夏祭り

前日の天気予報「くもりのち晴れ。」  
朝から、太陽の光はまぶしく  
体中から汗がふき出す

父は、朝早くからみこしを組み立てに  
家を出た。

「とんぼ」というかつぎ棒をひもでしばり  
さらしでしめあげる  
みこしを組み上げる父のうれしそうな顔が  
目にうかぶ

おはやしが流れ始めた  
はちまきをしめ直し、「さあ、出発だ。」

みこしのとんぼを肩に乗せ歩き出す  
「わっしょい！ わっしょい！」  
大声で自分をはげますように声を出す  
背中が、汗でびしょより  
額からも汗が流れ落ちる  
「わっしょい！ わっしょい！」  
幼いころの父の思い出も  
「わっしょい！ わっしょい！」  
幼いころの母の思い出も  
「わっしょい！ わっしょい！」  
ゴールを目指す

母たちが用意してくれたおにぎりを  
ほおぼりながら  
父の組み上げた「子どもみこし」と  
いっしょに歩けたことを ほこらしく思う  
数十年後、私が母となった時も  
父や母と同じように、子どもと過ごす  
未来へ絆をつなぐ  
羽生の夏祭り

## きらめく命

須影小学校 五年

清水 健太

「昔はこの辺の川にも

メダカやホタルがいたんだよ。」

じいちゃんが言った

「へえ、ぼくも見てみたかったな。」

えさやりと 水かえが

夏休みのぼくの仕事

学校から持ち帰った

ヒメダカの水そうで

ある朝 ぼくは見つけた

キラキラ光る 透明のつぶ

ぼくは 卵をつぶさないように

ホテイアオイの葉をつまんで

しんちように バケツへ移した

林間学校に行っている間に

メダカの赤ちゃんが

誕生していた

メダカの赤ちゃんは

ぱっ ぱっ と瞬間移動する

小さくて 透明で

目玉だけが きよろきよろして

忍者みたいだ

メダカの赤ちゃんを

見ているだけで

ぼくはうれしくなる

小さなつぶはないかな

毎朝 水そうをのぞく

メダカの命を守ることが

一番大事

大きく 元気に

育てよう

小さな

きらめく命を

## お獅子様

新郷第二小学校 四年

堤 莉穂

「わっせ わっせ」  
ドン ドン ドーン  
いせいのいいかけ声と  
太鼓の音が鳴りひびく  
眠い目をこすりながら外を見た  
朝の五時半  
お獅子様がやって来た  
十人もの男の人が一列になって  
走りながら家々をまわる  
梅雨のむし暑い中  
みんな汗びっしょりだ  
先頭はぼくのじいちゃん  
若い人に負けてない  
くつをはいたままざしきに入り  
玄関から出ていく  
家の中の通り道には汚れないように  
新聞紙がしきつめられていた  
玄関から出るのは  
悪いものをおい出すためだそうだ

全ての家をまわり終わり  
みんなでばんざい ばんざい  
「お獅子様」  
無病息災のためのお祭り  
ずっと昔から引きつがれてきた祭り  
大切にしたいふるさとの祭り  
このお祭りが終わると  
羽生に暑い夏がやってくる

佳作

つばめ

手子林小学校 一年

小泉 志織

おじいちゃんとおばあちゃんちの  
つばめがすだった  
まいとし  
おとうさんつばめと  
おかあさんつばめが  
やってくる  
たまごをうんで  
あたためて  
げんきなあかちゃんが  
なきだす  
ひよこひよこ  
かおがみえはじめる  
ことしはなんわの  
あかちゃんひながいるのかな

ごわのあかちゃんの  
おおきなくちが  
あいている  
うまれてそだった  
おうちのこと  
おぼえていてくれるかな  
またらいねんも  
まってるね

## はじめてむかえるおぼん

須影小学校 三年

小林 和磨

ぼくのおばあちゃんはきよ年亡くなった  
今年、はじめてむかえるおぼん  
お父さんとお母さんで仏だんの前に  
色々なかざりつけをしていた  
ぼくは、はじめて見た  
とてもふしぎな感じがした

八月一日、家ののき下に  
ちようちんをかざった  
おほかのそうじにも行った  
八月十一日、家のかざりつけをした  
竹を二本両がわにつけ、なわをはり、  
ほおづきと色紙をかざった  
なんか七夕のよう  
きゆうりとなすが馬や牛にへん身した  
亡くなった人が  
きゆうりの馬に乗り早く家に来て  
帰りはナスの牛でゆっくり帰るそうだ

八月十三日、おぼうさんが  
おきようをあげにやってきました  
ぼくには見えないけど、  
おぼんにはおばあちゃんが  
帰ってきてるんだって  
うれしい気がした

ぼくは、おばあちゃんが大好きだった  
毎日、朝と夜におせんこうをあげている  
お父さんもほめてくれる  
八月十六日、  
家族でおばあちゃんを送りに行った  
ぶじに帰れたかなあ  
また来年も帰ってきてね

## この道

村君小学校 六年

志賀 聖

ピピピピッ ピピピピッ  
朝六時 いつものようにベルがなる  
ねむい目をこすりこすり  
僕の朝が始まる

今日も学校だ

七時に家を出て集合場所へ  
すでに何人か来ている

「おはよう！」

班長の僕は先頭に立ち  
いつもの道を歩きだす

テクテクテク スタスタスタ

その日の気分でリズムが変わる

どれだけの日々 この道を歩いただろう  
学校までの二キロの道のり

景色は田んぼばかりだけど  
季節が変わると  
色が変わり 空気も変わる  
毎日 毎日 見ている景色は  
僕の成長といっしょに変化してきた

僕は今 六年生  
この道を歩くことは もうじきなくなる  
そう思うと  
この道をもっと歩きたくなる

## おいしい野さい

井泉小学校 三年

須藤 沙輝

「ウイーン、ガタガタガタ」

おじいちゃんがこううんきではたけをたがやす音

わたしは、パラパラとひりょうまきのお手つだい

「おいしい野さいができますように」

はたけのかみ様におねがいをする  
楽しみにしていたじゃがいもほり

まんまると大きなじゃがいもがコロコロでてくる

「わっせ、わっせ」

楽しくて、楽しくて、

「ワツハハハ」

顔の形をしたじゃがいも  
犬の赤ちゃんみたいな形のじゃがいも

「ワツハハハ」

またまた大きなわらいがとまらない  
お母さんがふかしいもを作ってきた  
みんなでパクリ

「あちちちっ」

さいこうにおいしい

今日は何を食べようかな

きゅうり、トマトのまるかじりにしようかな

パンパンにふくらんだ

えだまめにしようかな

どれもみんなとっておきのごちそうだ

はたけのかみ様、

おいしい野さいにしてくれて

ありがとう

おじいちゃん、

おじいちゃんが作る野さいは

日本一だよ

## ももちちゃんへ

手子林小学校 二年

三村 瑠基

ももちちゃんが、天国にいった。  
ぼくが生まれる前からいた家ぞく。  
あたまがよくて、やさしくて、ぼくたちの  
ことばがよくわかる犬だった。  
たのしいときもかなしいときもそばにいて  
くれたももちちゃん。  
すいかが好きだったももちちゃん。  
トマトが好きだったももちちゃん。  
つめきりと耳そうじがきらいだったももち  
ちゃん。  
じしんとかみなりもきらいだったね。  
ぼくが今、つたえたいこと。  
大好きなさんぽ毎日いけなくてごめんね。  
天国でたくさんはしってね。  
今までいっしょにいてくれてありがとう。  
ももちちゃんの分まではなちゃんが生き  
できるようにみまもっていてね。  
ももちちゃんのことわすれないよ。  
ほんとうにありがとう。ゆめであおうね。

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
心にひびきわたるドラムマーチ	新郷第一小学校 六年	飯田 萌恵子
思い出つまつたランドセル	新郷第一小学校 六年	池澤 萌々香
おばあちゃんとキンモクセイ	新郷第二小学校 六年	小川 花桜
いがまんじゅう	新郷第二小学校 五年	面村 風香
いつも見守ってね	三田ヶ谷小学校 四年	野中 柚希
夕方の音	三田ヶ谷小学校 六年	羽鳥 天音
せみ	新郷第一小学校 四年	宮田 綾乃
おじいちゃん、おかえり	井泉小学校 一年	吉澤 愛
わたしのすきな場所	三田ヶ谷小学校 三年	吉田 朱莉
はつくつ たいけん	村君小学校 二年	渡邊 大輝

## ◎中学生の部

### 太田玉茗賞

#### ハナミズキ通り

東中学校 二年

木宮 花恋

駅からつづく真つすぐな道  
そして歩道のハナミズキ  
小さい頃からずっと見てきた  
この景色が私は好きだ  
春になると花が咲く  
みんなの進級を祝うかのように  
赤と白で彩られ  
パツと明るい光を灯す  
やがて緑が深まって  
暑さと共に夏がやって来る  
青々としたハナミズキの葉は  
私たちにそよ風を吹かせてくれる  
外吹く風が心地よく

虫の合唱が始まれば  
葉っぱがみごとに色をつけ  
赤い夕日の色となる  
北風ピューピュー吹く頃は  
辺りはたちまち葉っぱのじゅうたん  
カサカサカサ  
カラカラカラ  
落ち葉たちは踊りだす  
もうすつかり冬になり  
ハナミズキたちもなんだか寂しそう  
ときには空から降ってきた  
白い服に身を包む  
しばらくするとまた春がやって来て  
そして花を咲かす  
ゆっくり歩道を歩いたら  
季節を感じるハナミズキ  
小さい頃からずっと見てきた  
真つすぐつづくハナミズキ  
曲がりくねってないところが  
未来へと続く道のように  
そんなところが大好きで  
私のふるさとがいいところ  
「ずっとこの景色が見られますように。」  
今日も私は願ってる

## 宮澤章二賞

### 夏の定番

南中学校 三年

亀山 莉奈

聞こえてくる雨がえるの合唱が  
蝉時雨に変わる頃  
庭の青じそが「もういいよ」と言っている  
夏の定番、冷や汁の時期がやってきた  
いつの頃からか汁を作るのは私の役目  
二、三粒パチパチはじけたいりごまを  
すり鉢ですると  
香ばしい香りが部屋に広がる  
ゴリゴリゴリいい匂い  
ここで待ってましたの青じそ投入  
一瞬にして  
さわやかな香りが鼻をくすぐる  
ゴリゴリゴリいい匂い

砂糖を入れて味噌を入れて  
つやが出るまでゴリゴリゴリで出来上がり

氷を入れて、冷たい水でのばして

私がお酢をかくし味

わが家ではばあちゃん和私しか知らない味

ばあちゃんはもういないけど

私にだけ教えてくれた秘伝のレシピ

冷や麦をひとすすり

冷たいのどごし

夏の定番

ふるさとの味

## 優秀賞

### 一粒の種

西中学校 一年

戸井田 未歩

「暑いなあ」

そう思いながら 机の上を片付けている  
ふと引き出しをあけると

そこには 一粒 向日葵の種が  
寂しそうに 私の顔を見ている  
私は あることを思い出す

今ぐらいの 暑い夏の日  
家族で向日葵畑へ  
着くとそこには 小さな太陽たちが  
キラキラと輝いていた

「ほら見てっ」  
その声に振り向くと  
姉の手の中に 一粒の種  
私は その時思わず

「それ、キラキラしてないっ」  
そう言っていた  
しかし、姉は  
「埋めればキラキラになるよ」  
そう言った

「暑いなあ」  
そう思いながら 私は今 庭にいる  
植木鉢に土を入れ 一粒の種をうめる  
毎朝 水をあげた

ある朝 植木鉢に向日葵の  
赤ちゃんがいた  
それから どんどん背が伸び  
その 伸びた先には つぼみが・・・  
そしてついに あの日と同じ太陽が  
そこに咲いていた  
一粒の種が キラキラとした  
太陽に 生まれ変わった

## 緑の向こう側

東中学校 三年

長谷川 翔大

ぼくの家の裏には  
用水路がある  
田んぼがある

小さいころは  
ドジョウをとったり  
ザリガニをとったり  
アメンボをとったり  
見えるのは  
にごった水の色と  
田んぼの緑だけ

少し大きくなった今は  
緑の向こう側まで  
見えるようになった  
家がある  
工場がある  
車がたくさん通っている  
灰色に輝いている

緑のずっと向こう側に  
灰色があることを知った

大人になったら  
何色が見えるだろう  
灰色の先には  
もっと灰色が見えるのかな  
おじいちゃんが言っていた  
大人になったら  
灰色の先に  
澄みきった青が  
見えるそうだ

## 背中

南中学校 三年

渡邊 可南子

大きなランドセルに  
たくさんの不安を詰め込んでいたあの日も  
目の前には先輩の背中があった  
夏は暑いし  
冬は猛烈に寒かった通学路  
学校はとつても遠く感じた  
でも私は一人じゃなかった  
一歳しか変わらないのに  
なぜだかとても大きく見えた二年生  
初めての先輩は少し恐かったけれど  
頼もしかった

初めての後輩  
私は嬉しかった  
でも、いまいち実感がない、分からない  
私の背中は  
ちゃんと頼もしく見えていただろうか  
一年生の私には

大人のように見えていた  
大きくて、かっこよくて  
憧れの存在だった  
私は、六年生になった  
でも、やっぱり  
想像していたものとは違って  
自分はまだまだ子供だった  
あの頃の私が見たら  
憧れてくれるのだろうか  
きっと、先輩たちの背中には  
一生追いつけないのだろう  
それは、年齢とは別のものかもしれない  
私はもうすぐ高校生になる  
きっと私はまた  
追いつくことのできない背中に向かって  
走ってゆくのだろう

# 佳作

## 羽生の風

西中学校 二年

石井 遥

窓を開けると：  
毎日違う風がふく  
うれしい事があつた時  
冷たい風がふき  
夏の暑さをやわらげてくれる  
つらくて悲しい事があつた時  
優しい風がふき  
「元気だして」とはげましてくれる  
なやみがある時  
力強い風がふき  
わたしの背中をおしてくれる  
「よーい：パンツツ」  
わたしは陸上部  
今度はわたしが風になる  
たくさんの思いがのっている  
羽生の風のように

## 思い出

西中学校 二年

柿沼 美咲

「まいてごらん」  
母から渡されたプレゼント  
私の両手には小さな向日葵の種  
嬉しくて嬉しくて無邪気にはしゃいだ  
私の小さい頃の夏の思い出―  
君の成長が楽しみで  
暑さも忘れて一生懸命世話をしたんだ  
君はどんどん成長していったね  
太陽に照らされ  
いつそう君は輝いてみえた  
君に出会えた時  
「ありがとう」  
そう語りかけてくれたように思えた  
今ではすっかり我が家の一員  
あの頃、君の背よりも小さかった私も  
もう中学生  
私も少しずつ成長してるかな  
今年も君から元気をもらったよ  
今度は私が元気を届けたい

来年は、真っ先に君に伝えるよ  
「ありがとう」  
そう言いたくて―

## 夏

西中学校 一年

斎藤 彩夏

深く濃い 群青色の空。  
照りつける太陽。額をつたう汗。  
関東地方の暑い夏到来。  
今年も暑い!!

グングンと張り出した入道雲。  
小さい頃はあの雲に乗りたかったなあ  
「そうだ!!」  
目を閉じて、あの雲に乗ってみよう。  
想像以上に居心地が良い。  
家も人もアリのように小さく見える。  
「おくい。」と呼んだら、  
この声、届くかな?  
みんな忙しそうだ。

ふわふわ、もっこもこの柔らかな感触で  
いつの間にか、眠りにおちた。  
どのくらい寝てしまったのだろう・・・

「起きろく起きろく」と  
目ざまし代わりのヒグラシの声

さわやかな風に乗って赤とんぼ達も  
やって来た。

夕暮れまで、もう少し・・・

夏が行ってしまうのももう少し・・・  
秋の気配も訪れ始めている。

楽しい時間が過ぎるのは早いものだ。

## いろんな緑

西中学校 二年

森田 真央

夏休みに出た美術の宿題

「ふるさとの絵を描いてきなさい。」

先生にそう言われたとき、

私はまっさきに家の裏にある

大きな大きなけやきの木を描こうと決めた

けやきの木は私が生まれるずっと前から

そこに立っている

風が吹くと

ザワ：ザワ：と葉っぱたちがさわぎだす

暑い昼間にはでっかい日陰を作ってくれる

画用紙には鉛筆で下描きをしたら

さあ、次は色ぬりだ

パレットに絵の具の緑を出して

もう一度と木を見上げてみると

あれっ？

ちよつと違う

緑は緑だけどこんな鮮やかじゃない

言うならば「自然」の色

太陽の光で色落ちした

黄が混じった緑

かげって少し暗く見える

黒っぽい濃い緑

絵の具だけじゃ表現できない色が

そこらじゅうにたっくさんある

緑の種類は

いったいいくつあるのだろうか？

絵の具の緑を見るより

外の緑を見ているほうが

何だかとても落ち着く

自然の中にいるといやされるのは

そのためなんだろうか

## 私のスタートライン

西中学校 三年

渡邊 南帆

ジリジリと灼けつくスタートライン

真夏の太陽の下

百メートル先のゴールを目指す。

オンユアマーク：セット：パン！

スタートダッシュに失敗。

「ファイトー！」の声を聞きながら

また、もとのスタートラインに着く。

今度は：思うようなタイムが出ない。

流れる汗を拭いながら

またスタートラインに戻る。

成功するまで、何度も何度もくり返す。

そうか、人生もきつと同じはず。

失敗しても、挫折しても、

またもう一度やり直せばいいんだ。

そして自分が納得のいくまでやり抜こう。

それは辛いけれど

ゴールを目指す自分との闘い。

来年の春

私はまた、次のスタートラインに立つ

でも生まれ育ったこの羽生の町が

私のスタートライン。

新たな世界は、楽しいことばかりではなく、

様々な試練が待ち受けているだろう。

でも壁にぶつかったら、

あの夏のスタートラインを思い出し、

何度でも走り出そう。

ふるさとの力強くて温かい風が

私のスタートを

そっとサポートしてくれるだろう。

何度でも、私の背中を押してくれるだろう。

だから自信を持って

スタートラインを飛び出す。

いつか笑顔でゴールするため。

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
水郷公園の夏	東中学校 二年	伊藤 さとり
勇気をくれる電車	南中学校 一年	桜井 魁星
藍染め	西中学校 三年	滝澤 直起
道	西中学校 三年	友成 英介
ふるさとのおい	東中学校 二年	中島 美沙樹
あいさつの魔法	東中学校 三年	根岸 真優